

「ハイ」と早速、五ヶ條の前文を声高らかに元氣良く称えりと、試験官は「良し合格だ」と言われた。彼の柿崎も合格した。私共は一度、中隊に歸つて二日位経つと夜中に秋田県出身の伊藤伍長が私共二人を引率して、暗闇を自動車に乗せて、たしか神奈川県二宮と思うが下志官学校に着いた。学校は町から程遠い辺地で山とも野原とも言われぬ原野で、た。学校の教官が私共を守衛の門前まで、迎えに来て居りました。（地理的に五所川原の味噌沢の様に感じた）

学校に入学してから軍隊に関する色々な勉強や実施訓練などの猛勉強でした。或る日、小休の時、教官は日本は敗戦色が濃くなった、南方は連合国に奪回されるし「アツツ島」は玉碎（昭和十八年五月二十九日一九四三）東京は全滅と言われた。教官はもうやる気が無くなったと言われた。其の内に沖繩に連合国が上陸し米國は広島や長崎に原爆投下、数日後、教官は今日、天皇の玉音「ラヂオ」で放送されるので全員宮庭に集合せよの命令でした。天皇の玉音を聞くと全員は戦争は終わった。日本は無條件降伏か、これからの日本はどうなるのかと涙を流した。教官は私と柿崎を呼んで今迄、知らせなかつたが、今度、新潟が危ないから、お前達の中隊は十日位前に新潟市の女学校の隣りの海岸地帯に三個中隊編成で異動した。日本は敗戦で戦争が終つたのでお前達二人は今夜の夜行に乗つてすぐ新潟の秋山隊に歸れ、と命令されたので私達二人は其の夜、原隊に歸つたが、私達二人は下士官学校に十数日在学しただけだった。

新潟の秋山隊に歸ると、古参兵や他の兵達はみな復員の準備やら故郷に歸つた人々が大部分であつた。兵舎に残つたのは中隊長や下士官と私迫りければ、朕か皇祖仁孝天皇、皇考孝明天皇、いたく宸襟を悩し給ひしこそ忝くもまた惶けれ。然るに朕幼くして天津日嗣を受けし初、征夷大將軍其政權を返上し、大名小名其藩籍を奉還し、年を経すして海内一統の世となり、古の制度に復しぬ。是文武の忠臣良弼ありて、朕を輔翼せる功績なり。曆世祖宗の専蒼生を憐み給ひし御遺澤なりといへとも、併我臣民の、其心に順逆の理を齎へ、大義の重きか程に陸海軍の制を今の様に建定めぬ。夫兵馬の大權は朕が統ふる所なれば、其司々をこそ臣下には任すなれ、其大綱は朕親之を攬り、肯て臣下に委ぬべきにあらず。子々孫々に至るまで篤く斯旨を傳へ、天子は文武の大權を掌握するの義を存して、再中世以降の如き失體なからんことを望むなり。朕は汝等軍人の大元帥する所。されば朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰きてこそ其親は殊に深かるべき。朕か國家を保護して上天の恵に膺し、祖宗の恩に報いまらすことを得るも得ざるも、汝等軍人が其職を盡すと盡さざるとに由る所かし。我國の稜威振はざることあらば、汝等能く朕と其憂を共にせよ。我武維揚りて其榮を耀さば、朕汝等と共に其譽を偕にすへし。汝等皆其職を守り、朕と一心になりて力を國家の保護に盡さは、我國の蒼生は永く太平の福を受け、我國の威烈は大に世界の光華ともなりぬへし。朕斯も深く汝等軍人に望むなれば、猶訓諭すへき事こそあれ。いてや之を左に述へむ。此処迄が前文である。

一軍人は忠節を盡すを本文とすへし。凡生を我國に稟くすもの誰かは國に報ゆるの心なかるべき。況して軍人たらん者は、此の心の固からては、物の用に立ち得へしとも思はれず。軍人にして報國の心堅固ならざるは、如何程技藝に熟し學術に長するも、猶偶人にひとしかるへし。其隊伍も整ひ、節制も正くとも、忠節を存せざる軍隊は、事に臨みて

と柿崎の十数名だけで残つた私達は中隊長の命令で兵器や軍隊に関する書類や其の他の物は皆な海中に投げたり焼去した。秋山中隊長は中隊解散時に挨拶の中で、世の中が落着くまで婦女子を外に出さない事や軍隊の階級、軍隊に志願したなど絶対に言うてはならない、ヤンキー（米國人）は野蛮人で何にをするか分からないからと挨拶した。

軍人勅諭五ヶ條を後世の爲に「かたりべ」に記載し保存したいと思う。

軍人に賜ひし勅諭

「我國の軍隊は世々天皇の統率し給ふ所に所ある。昔神天皇射つから大伴、物部の兵ともを率る、中國のまつろはぬものともを討ち平らけ給ひ、高御座に即かせられて天下しろしめし給ひしより、二千五百有餘年を経ぬ。此間世の様の移り換るに隨ひて、兵制の沿革も亦履なりき。古は天皇射つから軍隊を率ひ給ふ御制にて、時ありては皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれと、大凡兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき。中世に至りて文武の制度、皆唐國風に倣はせ給ひ、六衛府を置き、左右馬寮を建て、防人など設けられしかば、兵制は整ひたれとも、打續ける昌平に狙れて、朝廷の政務も漸文弱に流れければ、兵農おのつから二に分れ、古の徴兵はいつとなく壯兵の姿に變り遂に武士となり、兵馬の權は一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し、世の亂と共に政治の大權も亦其手に落ち、凡七百年の間武家の政治とはなりぬ。世の様の移り換りて斯なれるは、人力もて挽回すへきにあらずといひながら、且は我祖宗の御制に背き奉り、淺間しき次第なりき。降りて弘化嘉永の頃より徳川の幕府其政衰へ、剩外國の事も起りて、其侮をも受けぬへき勢に鳥合の衆に同かるへし。

抑國家を保護し國權を維持するは兵力に在れば、兵力の消長は是國運の盛衰なることを齎へ、世論に惑はず政治に拘らず、只一途に己か本分の忠節を守り、義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも軽しと學悟せよ。其操を破りて不學を取り、汚名を受くるなかれ。

一軍人は禮儀を正くすへし。凡軍人には上元帥より下一卒に至るまで、其間に官職の階級ありて統属するのみならず、同列同級とても停年に新舊あれば、新任の者は舊任のものに服従すへきもの。下級のものは上官の命を承ること、實は直に朕か命を承る義なりと心得よ。

己か隸属する所にあらずとも、上級の者は勿論停年の己より舊きものに對しては、總へて敬禮を盡すへし。又上級の者は下級のものに向ひ、聊も輕侮驕傲の振舞あるへからず。公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれとも、其外は務めて懇に取扱ひ、慈愛を專一と心掛け、上下一致して王事に勤勞さよ。若軍人たるものにして、禮儀を紊り、上を敬はず下を惠ますして、一致の和諧を失ひたらんには、啻に軍隊の蠱毒たるのみかは、國家の爲にもゆるし難き罪人なるへし。

一軍人は武勇を尚ふへし。夫武勇は我國にては、古よりいとも貴へる所なれば、我國の臣民たらんもの、武勇なくては叶ふまじし。況して軍人は戦に臨み敵に當るの職なれば、片時も武勇を忘れてよかるべきか。さはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同からず。血氣にはやり粗暴の振舞などせんは、武勇とは謂ひ難し。軍人たらんものは、常に能く義理を齎へ、能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るへし。小敵たりとも侮らず、大敵たりとも懼れず、己が武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれ。されば武勇を尚ふものは、常々人に接するに温和を第一とし、

諸人の愛敬を得むと心掛けよ。由なき勇を好みて、猛威を振ひたらは、果は世人も忌嫌ひて、豺狼などの如く思ひなん。心すへきことにこそ。一軍人は信義を重んずへし。凡信義を守ること常の道にはあれと、わきて軍人は信義なくては、一日も隊伍の中に交りてあらんこと難かるへし。信とは己か言を踐行ひ、義とは己か分を盡すをいふなり。されは信義を盡さむと思はれ、始より其事の成し得へきか得へからざるかを審に思考すへし。臍氣なる事を假初に諾ひて、よしなき關係を結び、後に至りて信義を立てんとすれば、進退合りて身の置き所に苦むことあり。悔ゆとも其詮なし。始に能く事の順逆を辨へ、是非を考へ、其事は所詮踐むへからずと知り、其義はとも守るへからずと悟りなは、速に止るこそよけれ。古より或は小説の信義を立てんとて大綱の順逆を誤り、或は公道の理非に踏迷ひて私情の信義を守り、あたらず英雄豪傑ともか、禍に遭ひ身を滅し、屍の上の汚名を後世まで遺せること、其例尠からぬものを。深く警めてやはあるべき。

一軍人は質素を旨とすへし。凡質素を旨とせされは、文弱に流れ、輕薄に趨り、驕奢華麗の風を好み、遂には貧汚に陥りて、志も無下に賤しくなり、節操も武勇も其甲斐なく、世人に爪はしきせらるゝ迄に至りぬへし。其身生涯の不幸なりといふも中々愚なり。此風一たび軍人の間に起りては、彼の傳染病の如く蔓延し、士風も兵氣も頓に衰へぬへきこと明なり。朕深く之を懼れて曩に免黜條例を施行し、略此事を誠め置きつれと、猶も其悪習の出んことを憂ひて心安からねは、故に又之を訓ふるそかし。汝等軍人ゆめ此訓誡を等潤にな思ひそ。右の五ヶ條は軍人たらんもの暫も忽にすへからず。さて之を行はむには、一の誠心こそ大切なれ。抑此の五ヶ條は我軍人の精神にして、一の誠心

はまた五ヶ條の精神なり。心誠ならされは、如何なる嘉言も善行も皆うはへの裝飾にて、何の用にかは立つへき。心たに誠あれば何事も成るものそかし。況してや此五ヶ條は天地の公道人倫の常經じやうけいなり。行ひ易く守り易し。汝等軍人能く朕か訓に遵ひて此道を守り行ひ、國に報ゆるの務を盡さは、日本國の蒼生舉りて之を悦びなん。朕一人の憚のみならんや。

明治十五年一月四日
御名 御 爾

津軽井、嘉瀬の小話集

(6) イバダダ標準語

十月吉日、秋男は、村一番の美人絹子と結婚式をあげた。その夜二人は、東京、熱海方面に新婚旅行に出発した。しかし、汽車の中でも、二人は津軽井のため、周囲の人に恥ずかし、思うように語り合うことができません。東京に近くなつて、秋男は、「東京サ、着イダラ、標準語デ、話し合うべ」と絹子にささやいた。上野駅前、磐城ホテルに宿をとり、二人は夜の銀座へと出掛けた。三菱電機の本屋のような照明、森永キャラメルの大ネオン、ライトの長蛇の列、初めて見る銀座の夜景に、絹子の足はしばしば止ります。秋男は、やさしく彼女の手を引き、「早く、アベタマイ」「ハイッ」とうなづき、歩きかけた絹子は、立止り、「うふふ」と笑いだした。「どうした？」と、のぞきこむ秋男の耳元に、絹子はささやいた。「アంత、今の標準語、イバダジャないの」(木村)

五十年前 その時 私は

山 中正 津

一 昭和十六年十二月八日

「お早よごす。(お早ようございます。)」と言って、郵便局の通用口から、ガラス戸を開けて事務室へ入った途端、「始まった。アメリカどつ!。」局のオドサ(郵便局長)は、和服姿でメガネ越しにギョロリとにらみつけるように、大声で言った。私は何を怒られたのかと思つて、一瞬足を止めて、オドサの顔を見た。するとオドサは、

「今朝のラジオ聞がネが、六時のニュースで、日本どアメリカど戦争ネなつたんだネ。こんだ、支那どアメリカカばれでなく、日本は世界を相手に戦わねばまいなぐなるなア。」

オドサは、困つたなあ、というような顔をして嘆息した。先輩の浜田さんも、机の上を掃除しながら、オドサの話に耳を傾け、「日本、勝ちにいいもんだべか?。」と言うと、オドサは、

「日本人は大和魂あるネ。したばて、大和魂だけでだばなあ。アメリカだのイギリスだのオランダだのって物資有るし、科学も進んでるし、長くなれば大變だなあ。これがらだば、滅多なことじゃべられなぐなる

はで気をつけねばまいネや。」

昭和十六年(一九四一)十二月八日の朝の会話でした。

私は、昭和十五年高等小学校を出てから村の郵便局に勤めた。一年先輩の浜田定雄さんは、為替・貯金・簡易保険などの担当で、実質的に局長代理の役目で、私は郵便・小包・電報・電話の受付で、収入印紙や切手、はがきを売ったり、来信の電報の配達や呼出電話の通知に歩いたり、結構動き廻る仕事であった。

その日事務室の隣りの部屋(一応休憩室というのだが、殆んどは局長の趣味の囲碁を打つ部屋である)に置かれたラジオは一日中鳴りっぱなしで、私たちの出勤してからも何回か、軍艦マーチの前奏で、『大本営陸海軍八日午前六時発表わが軍は、八日未明米・英軍と戦闘状態に入れり!』

大本営陸海軍発表として十二月八日(日本時間)未明の真珠湾攻撃での敵艦撃沈の戦果などを報じていた。

呼出し電話(当時は電話の加入者も少なく、嘉瀬では村役場と産業組合ぐらいのもので、村民は緊急の場合郵便局の電話を利用した。)の知らせに村内を自転車で走り廻っていると、村人の顔つきが、昨日と違うよ

うに見えた。何か緊張した、悲壮な面持ちに感じられる。

上村（現五所川原市長富・中野新田を指した。当時嘉瀬局の電報配達区域）へ電報を配達に行く道すがら考えた。

（これからは軍人の世界になるのではないか。日本の戦国時代の武将も、百姓の伴でも一國一城の大名になれる。軍隊も中学校・大学へ入らなくても将校になる道がある。何か少年兵の学校へ入る事を調べてみよう。しかし、オドサの言ったこれからは戦争が長くなれば大変だという言葉も何を意味しているのだろうか。日本は最後に負けるということか、また、減多なことはしゃべられなくなるということは、何故なのか、何か恐い世の中になるといふ暗示なのか。忘れていたが、三上巡査（待ったなしとアダナされた駐在巡査）が私たちの小学校三・四年生当時の綴方文集（生活綴方）「呼笛」を全部借りると言って持って行って返してこないのも何か不安を感じる。そうすれば軍隊に居れば一番安全でいて国の為になるのではないか。よし、軍隊に入る学校をさがしてみよう。）私は身体が弱く、高等小学校の頃は病気で学校を休む日が多かったので、軍隊に入れるような体力でないことを自覚しながらも、じっとして居られない気持ちで、密かに陸軍少年兵学校について調べて見た。

○陸軍少年航空兵Ⅱ応募年齢 満十五歳以上十七歳未満の者

○少年通信兵Ⅱ応募年齢 満十五歳より満十八歳までの者

少年航空兵は、修業年概ね三箇年とし、入校概ね一箇年後、適性に依りて操縦、無線、整備の三科に別れて教育を受け、卒業後は飛行隊に配置して概ね六箇月後、航空兵伍長に任官される。

志願手続は、陸軍航空本部（東京市麹町区隼町）、全国各連隊区司令部で交付する志願票に、必要事項を記入して差出すのであるが、詳細は

志願票交付所又は市町村役場の兵事係で聞くこと。

少年通信兵は、陸軍通信学校で、毎年召募し、その採用試験に合格した者を採用する。

修学は、前記の学校で二箇年間、無線通信に関する修学をなし、卒業したものは一箇年間、下士官候補として電信隊に配属せしめ、後工兵科下士官に任ずるものである。

志願手続は直接、陸軍通信学校（東京市杉並区馬橋）へ問合わせるか又は、市町村役場の兵事係で尋ねること。

そのほかに、千葉県千葉市にある陸軍戦車学校でも少年戦車兵を募集しているが、戦車兵は特別頑健な体軀の持主でなければならぬというので私の及びもつかないので、陸軍少年航空兵か少年通信兵を志願してみようと思った。

海軍では、海軍少年航空兵（海軍乙種飛行予科練習生）と海軍甲種飛行予科練習生というのがあるが、前者は、学歴に制限がなく高等小学校卒業程度の者を試験の上採用し、航空機操縦及び機上作業を練習させ、卒業者は、各航空隊に配属し、後、航空兵下士官となるものである。

又、後者の海軍甲種飛行予科練習生は、年齢・学力は、満十七歳から満二十歳まで、学力は中学四年第一期修了以上とする。

修業年限は、呉海軍航空隊に於て一箇年基礎教育、二箇年実施教育を受ける。成績優良者は、特務士官より、更に少佐、中佐まで進級出来る。とされている。

「七つ釘に桜に錨……の予科練の歌」に出てくる予科練とは前記の乙種、甲種飛行予科練習生の略称である。

私は、海は苦手で、矢張り海軍よりも陸軍の軍人になりたいと思って

いた。

少年航空兵については、私の小学校の二年上で、同じ町内（寺コ町）の門下寺の息子で山中弘というのが、東京陸軍航空学校に入り、昨年の夏、少年航空兵の制服姿で帰省し、私たちの憧れの的となっていたことにも起因する。山中弘飛行兵は昭和十九年五月十八日ニューギニア島ツクデで戦死。

当時、各市町村には青年学校というのがあった。これは小学校を卒業した勤労青年に、職業教育、普通教育、軍事教育を行なうというものであったが、昭和十四年から満十二歳から満十九歳までは義務制となり、主に夜間の授業で、軍事教練が中心となっていた。

夜間の授業の理由としては、日中はそれぞれ働いているのと、校舎は小学校を利用するという点にあった。

私は、青年学校にはあまり出席しなかったが、何回か友達に誘われて行って見たら、教室での勉強よりも、体操場で軍事教練をしたり、銃剣術の練習をするなどの方が多かったように記憶している。

青年学校への出席率の悪い者は、徴兵検査（満二十歳の男子は、特別な者を除き全員受ける徴兵制度があった。）の際に懲戒されるので、必ず一定の時間は確保しなければならないとされていた。

私は村の青年学校での出席数は足りなかったが、昭和十八年に仙台通信講習所へ入った時の軍事教練の時間が加えられたので、心配なかった。

昭和十六年十二月八日の大東亜戦争（太平洋戦争）突入の日に考え、少年航空兵か少年通信兵になりたいという希望は、それから三年して、昭和十九年二月に少年航空兵の受験をし、三月末に合格通知が来て、岐阜陸軍航空整備学校奈良教育隊へ入校が決り、ようやく実現した。

勝った、勝ったの大本営発表も、昭和十九年ごろになると戦争末期的症状となり、満二十歳の徴兵年齢も十九歳となり、その年は合同の徴兵検査が行なわれるなど、軍は兵隊集めに躍起となっていた。

陸軍少年航空兵の年齢制限も解除、徴兵検査前の若者の志願を歓迎していたのである。受験の際の適性検査で、操縦、整備、通信に分けられ、合格通知と同時に科別の入校場所が指定されてきた。

昭和十五年ごろの郵便はがきは二銭（封書は四銭）だった。ある日局の窓口へ「はがき二枚下さい」と云って参銭差出した娘さんが居た。二銭になる以前は老銭五厘だったのだ。よく軍隊では、意地悪な古参兵は、「貴様ら（召集兵）は消耗品だ、老銭五厘でいくらでも集められるのだ」と言って気合いをかけているという話を聞いたことがある。

尊い人命も老銭五厘のはがきよりも軽く扱われた時代もあったのだ。

二 昭和十八年から十九年

清明寮。仙台通信講習所の寮の名前である。

その名の如く、清く明るく、すがすがしい空気に満ちている建物というイメージとは大違いで、古色蒼然たる、とは言わないが、相当な年数を経た木造の建物である。しかも、先輩の講習生の外に、私たち寒い土地に育った者には見たこともない主が住んでいた。

昭和十八年の春、局長（山中禮一郵便局長Ⅱ故人Ⅱ）から褒められ、仙台通信講習所で業務の勉強をしてくることになった。条件はあったものの無試験で入所出来ることには大きな魅力があった。

当時は大東亜戦争の真っ直中で、学校で勉強するのも大変な時代であっ

た。青少年達からは、軍の学校が大持で、次に官立の講習所への希望者が多かったようである。ある新聞社の調査によれば、高等学校・大学の予科、陸、海、空軍の学校、通信や鉄道など官立の講習所等の受験競争率は、海軍兵学校が一位で、仙台通信講習所が二位。三位は東京陸軍幼年学校であったと報じられた事を記憶している。

農村の次・三男は勉強したくても貧しくて高等学校・専門学校・大学へと上級の学校へ進めない。

軍の学校や官立の講習所は官費で勉強出来、その者の努力次第で、出世への糸口になるのだから人気のあるのも当然のことであろう。

その仙通講へ推せて入所出来るのだから二つ返事でお願ひした。これは一般募集ではなく特定郵便局に勤めている職員の中から局長の推せて、各県五〜六名位の割合で入所させたようである。

津軽からは、南津軽郡柏木町（現平賀町）柏木郵便局の成田藤吉君、同じく南郡の光田寺村（現田舎館村）川部郵便局八木橋祐弘君、それに私の三人で、南部からは、下北郡大間町大間郵便局中新徳松君、三戸郡平良崎村（現南部町）諏訪ノ平郵便局から平良某（名前を忘れた）の二名、合せて五名が青森県からの入所者である。

東北六県から入所してきた三十何名かの講習生は清明寮にてそれぞれ各県ごとに自己紹介などしながら一室に集って寮長の指示を待った。

五十年以上も前の事なので記憶も薄らいでいるが、部屋は六畳間で一部屋に二人づつ入ったように思われる。私と同室は、岩手県佐比内村（現日詰町）佐比内郵便局からきた高橋隆治君だった。

同県人は皆バラバラになり外の県人との組み合わせになったと思う。

講習所は、御霊屋下という所にあり、伊達家の霊廟瑞鳳殿はすぐ近く

あちこちの部屋からもパツパツと電燈が灯り、叫び声が聞こえる。初めて見た。これが南京虫というものか。これがこの寮の主になつていたのか。逃げ隠れた穴へ千枚通しをつき立てて二、三匹つき刺した。油くさい嫌な臭いがした。大騒ぎした割にいずれも戦果は少ないようだった。

翌日、高橋君は各部屋を廻って歩いて情報を集めてくる。成田君は廊下に出してその上に寝たそうだと。眼鏡の下から寝不足の目をショボつかせて、「やア、参ったよ。廊下に机を二つ出して、その上に押入れの戸をのせて寝台を作って寝たが、それでも奴さん血を吸って行きやがった。」と首すじの赤い斑点を見せて言った。「お前の血がうまいんだよ。きつと。」私は慰めにもならない言葉で、そうとしか言いようもなかった。私も八木橋君も彼が医者から貰ってきている軟膏をつけさせてもらっているのだ。

南京虫については、二週間もすると免疫性になったというか、退治する要領がわかったというか、誰もがあまり騒がなくなった。

朝登校する時は、大体集団を組んで行き、下校の時は三三五五という風になるが、その場合どうしても県人同士が固ったり、他県人でも同室とか、仲好しになった者が一緒に歩くようになる。

成田君は、最年長者で妻帯者でもあった。彼は足が不自由な為に軍隊にも入ることもなく柏木郵便局の局長代理を勤めていた。

講習所での勉強は、業務関係（為替・貯金・簡易保険、郵便の法規から実務）、中等学校程度の一般学科が教えられる。

業務関係については、各自が現業局で少なくとも一年以上、長い者は五〜六年も仕事をしてくるので、新たに法規的に基礎から勉強し直

で、山手にある清明寮との往復の途中になっている。また繁華街に出るには、片平町に出て東北帝国大学（現東北大学）の構内を通れば近道である。学校生活に慣れ、休日など陰気くさい寮に燻っているよりも、懐は淋しいが街へ出て遊んで来ようという時など（遊ぶといっても戦時中で遊戯場は何もない。東一番町をぶらぶらしたり、藤崎・三越百貨店などをぞいて見るだけ）はよく大学の裏門から入り構内を通り、表門へ抜けたものである。

冒頭に書いたように清明寮には、建物が古いだけに夜になると恐ろしいものが出てくる。消灯して一時間もすると、グッスリ眠っている寮生たちの腕といわず、首といわず吸血鬼（虫）が血を吸いにくるのだ。はじめのうちは蚊にでも刺されたのかと思っていたが、どうも痒みが違う。食われた跡が、赤い斑点になる。

成田藤吉君は夜中の吸血虫に食われた跡が化膿して医者通いをするほどになった。どうもこの主は新入生を好むらしい。しかも北国の者ほど被害が大きい。宮城、福島の人たちは知らんぷりをしている。

一週間ほど悩まされた末に、この吸血虫を退治することになり、先輩たちからその方法を聞いた。土曜日の夜、消灯して約一時間、眠ったふりして敵の出でくるのを待つ。敵もさる者寝息をたてなければ出て来ないという。寝息を立てているうちにほんとうに眠ってしまったもや被害にあった奴もいると聞く。

さて、我々の部屋にもカサコソとかすかに足音が聞こえる。高橋君がサツと起きて、パツと電燈をつけた。曲者の正体は何か。真黒な西瓜の種粒のような虫が電燈の光に恐れてサツサツと逃げてゆく。畳の透き間や押し入れの中の木の割れ目などへまたたく間に姿を消してしまった。

すという事で、あまり苦にならないのが大方であるが、普通学科には、国語も歴史も、地理も数学も一からの出発で年長者ほど苦労した。

体育は、殆んど軍事教練で、木銃を持って銃剣術の稽古が主だった。予備役の将校が教官を勤めていた。腰に長い剣を下げた年配の教官は、あまり厳しくなかったが、助手を勤める下士官（軍曹か曹長ぐらい）は張切ってしまった、何をやっても汗が出るまで許さなかった。一度、行軍と称して、七月の暑い日に戦闘帽に巻脚絆（ゲートル）、地下足袋姿で、仙台の西の端にある大崎八幡神社まで駆足である。何キロあるのか知らないが、とに角遠く感じた。大崎八幡神社の境内までは急な石段があつて、その石段を登るに、顎が膝につくような格好で、膝の上に手を置き、持ち上げるようにして一步一步登って行ったことを思い出す。それでも、拜殿までたどり着き、「ヤッター！」と思わず万歳と叫びたくなるような感動を覚えた。行きはよいよい、帰りは怖い、の歌ではないが、登った以上降りなければならぬ。その石段を下りるのが大変だ。膝小僧がカクンカクンと横歩きしながら、汗びっしょりで、登る以上に時間をかけて下りてきたことは忘れられない。

体育の時間でもう一つ記憶にあるのは、弓道である。本式な弓や矢を見たのは、その時が初めてである。

弓と言えは小学生の頃、生柴を四尺（一・二メートル）くらいに切り、矯めて少し太目の尻糸で弦を張った短い弓で遊んだものだが、矢は茅の真直なものをこれも三尺（一メートル弱）くらいに切って揃え、腰に差して野良猫や犬を追いかける程度で、射ても当たったためしもなく、もう一つは、どれだけ矢が遠くまで飛ぶか遊び仲間と競争したが、弓についての知識の全部である。

今日の前にある弓は、本体が七尺（二・一メートル）以上もあり（注
Ⅱ我が国の長弓は七尺五寸が規定）、見上げるような長さで、それに弦
（つる）が外されている。これが、時代小説に出てくる鎮西八郎（源為
朝）の強弓なのだろうか、としきりに感心したものである。

上衣を脱ぎ、裸足で道場に集合させられた私たち三十何名かの生徒は
おそらく本式な弓道を知っている者は少ない筈だ。剣道・柔道・銃剣道
は知っていても弓を射るといのは物語りの中の出来ごとだと思ってい
た我々に、今それを教えてくれるというのだ。

先生は、立派な体格の持主で、白い稽古着から筋骨隆々の太い腕をの
ぞかせ、少し腹が出ているが、いつも胸を張った姿勢の良い三十年輩の
人で、講習所の教官なのか囑託なのか分らないが、私たちの目の前には
二回より現われなかった。

「これから弓道についての講義をする。その場に、正座ッ。正座した
ら、丹田に力を入れ、目を半眼にして、全神経を耳に集めて私の話を聞
きなさい。」

その後どのような話をしたのかよく覚えてないが、弓道についての心
得などを三十分ほど語ったようであった。私たちはもう足がしびれて、
丹田の力（下腹に力を入れる事）も、半眼も何処へやら、早く話が終れ
ばよいと願った。先生は、「もう、みんなくたびれたなあ、それでは起
立ッ。」と号令をかけたが、誰一人きちんと立ち上れた者はいなかった。

「なんだ、だらしがない。みんなは丹田に力が入り方がなってないから
だ。それでは、わしの下腹を一つ力いっば突いて見る。一人づつ順々に
突いて来い。」先生は、足を少し開き、腰に両手を当てて突立った。私た
ちは、順番に、握りこぶしを固めて力いっばい下腹目がけて突いていっ

らせる。的は練習用のワラ大鼓（そう言ったかどうか、名称はわからな
いが、形から自分なりに名付けた）だ。左の列から順番に前に出て来な
さい。まず私が手本を見せる。グーッと引き絞ったら、息を止める。パッ
と離す。」

ワラで作った直径一メートルもあるような大きな大鼓の形をした的が
道場の真中に据えられて、約五メートルほど離れたところから射るので
ある。

手本を示す先生の矢はグサリとワラ大鼓の真中に三分の一ほど突き
刺さった。生徒たちは入れかわり立ちかわり、矢を射るが、先生の射た
ように突き刺さるのではない。私の番がきて、大きく息を吸って弦を引き
絞ったが、手がふるえて、無我夢中で矢を離れた。的の端に刺さるには
刺さったが、ダラリと下がっている。一巡して先生の講評は、「みんな
の腹が据ってない。丹田に力を入れ、無我の境地で矢を離せば必ず的中
するのだ。まあ、はじめての事だから仕方ないだろう。」と言われた。

私は本式な弓を手にしたのは、後にも先にもこの時一度だけであった。
世は正に戦時中で、誰も彼もが緊張感を以って行動している時に、こ
んな惚けた先生も居った。容姿そのものがあだ名のごとく「蝦蟇蛙」に
似た、飄飄とした人物である。担当は地理で、何時も予告なしに試験を
やる。そして曰く、「今日の試験問題は、抜き打ち的だから、分らない
者は自分の出身地の地図を書きなさい。山・川・都市など大体八分どお
り書いたら五十点上げよう。」こんな調子である。五十点以上になれば赤
点にはならないのだ。この先生の趣意は、世の中は教科書どおりでなく
てよいのだ。世界の地図を覚えられなくても自分の郷土をしっかりと知っ
ているだけでもよいのだ。という教育の仕方だった。

た。まるで固くしばった米袋でも突いたような感じで、とても人のお中
とは思われなかった。正に臍下丹田は鍛えてあるのだ。

それから一週間後だったか、二週間経ってからのだったか、また道場に
集められ、「今日は講義だけでなく、実地に弓を手に取って射る練習を
しよう。」と五列に並ばせ、その場に正座させてから先生は、五張の弓を
各列に立てかけ、弓の名称について説明した。「今までに弓を射た経験
のある者はいるか。」誰も返事はなかった。「このような弓を見た事のある
者は？」これには、何人かの声が上がった。驚いたことには、その何人
かのうちの一人に我が成田藤吉君もいたことだった。

本体を弓幹というのだそうだ、弦を張る本体の上の方を末弭、下の方
を本弭と称し、矢をつがえる所を矢摺藤、左手で握る所を弛拵というこ
とだそうだ。私は、記憶力が弱いのですぐメモをする癖がある。古いメ
モ帳を探したが見当たらないのでここに書いた名称は大辞泉からの確認
である。

先生の説明も以上のようなことだったと思う。

先生は先ず弓道射法についての基本姿勢を示して見せた。それから最
前列の者五人を立てせ、弓と矢をそれぞれ持たせ、先生の仕草のとおり
やらせた。誰もが初めての事で動作がぎこちない。先生だけがきちんと
決っている。

- ①足踏み
- ②銅造り
- ③弓構え
- ④打起し
- ⑤引分け
- ⑥会
- ⑦離
- ⑧残身

これが弓道射法八節という基本動作なのだそうだ。（大辞泉より）
この時は、弦から矢を離さず、型だけ各自二回練習した。一通り終っ
たところで先生は、「もう時間がなくなったので、一人一回だけ矢を射

その点、我が友中新君は特異な存在だった。業務科の勉強に來たわれ
らなのに、彼は、休み時間も放課後も電信の勉強ばかりしていた。暇さ
えあれば、トンツ、トンツ、ットントントン（・、・、・、・、・、・、
とモールス符号の暗称をしていて、教室の隅に置かれてあった電信機に
しがみついていたのである。

そして業務科の成績は芳しくなかったが、電信機による電信の送受信
をマスターしてしまったのである。

私たち講習生は、特定局の無集配三等局の出身が殆んどなので、電信
機による電報の送受信はやらないで電話による集配局（例、金木局が郵
便の集配局で電信機の設備があり、嘉瀬、喜良市の両局は無集配局で、
金木局から電話で電報を受ける）からの電文の伝達である。

五十数年前の記憶を呼び戻して、電文を送る際使用する符号をイロハ
順に記してみる。

- イ（イロハのイ） ロ（ローマのロ） ハ（ハガキのハ） ニ（ニホ
ンのニ） ホ（ホケンのホ） ヘ（ヘイタイのヘ） ト（トウキョウ
のト） チ（チドリのチ） リ（リンゴのリ） ヌ（ヌマツのヌ）
ル（ルスキのル） オ（オウサカのオ） ワ（ワラビのワ） カ（カ
ワセのカ） ヨ（ヨシノのヨ） タ（タバコクタ） レ（レンゲのレ）
ソ（ソロバンのソ） ツ（ツルカメのツ） ネ（ネズミのネ） ナ
（ナゴヤのナ） ラ（ラッパのラ） ム（ムセンのム） ウ（ウエノ
のウ） エ（エイゴのエ） ノ（ノハラのエ） ヲ（ヲワリのヲ）
ク（クルマのク） ヤ（ヤマトのヤ） マ（マッチのマ） ケ（ケン
キのケ） フ（フジサンのフ） コ（コドモのコ） エ（カギのアル
エ） テ（テガミのテ） ア（アサヒのア） サ（サクラのサ） キ